

テレビ視聴と子どもの発達

—小・中学生を対象とした質問紙調査から—

表 真 美

(発達教育学部)

1. 研究の目的

我が国の生活において、テレビは不可欠のものとなっている。NHKが全国の16歳以上の国民に行った「日本人とテレビ2005」調査によると、テレビ視聴は1985年以降増加傾向にあり、一日4時間以上見る人が36%、4割以上が「なくてはならないもの」と回答した。とくに「ニュースや情報を知る」場合の「速報性」や「わかりやすさ」においては、他のメディアを引き離して高い評価を受けている（日本放送協会2005）。

一方で、就寝時間の遅れと子どものテレビ視聴が結び付けて論じられている。近年、基本的な生活習慣の乱れ、とくに就寝時間・起床時間の遅れにともなう子どもの変化が問題となっている。深夜営業する店舗が増えるなど、都市部を中心に社会全体の活動時間が深夜にシフトしていることが一因と考えられるが、地方においても子どもの夜型生活が進行していることが指摘されている（神川2005）。ベネッセが2005年に行った「子どもの生活実態基本調査」によると、睡眠時間は年齢が上がるとともに短くなり、「6時間以内」と回答する子どもの割合は、小学生3.2%、中学生18.4%、高校生では50.1%であった。睡眠時間の不足は、中・高校生の7～8割が「だるい」「朝、なかなか起きられない」などの疲れを訴える理由の一つと推測されている。同調査においては、睡眠時間短縮の要因として、通塾による帰宅時間の遅れとともに、「テレビ・テレビゲーム」時間の長さが指摘されている（ベネッセ2005）。

このような中、国や教育委員会が家庭における子どもの生活を指導する動きが強まっている。

代表例が、文部科学省の推進する「早寝早起き朝ごはん」運動である。学習意欲や体力、気力の低下のもととなる家庭における食事や睡眠などの乱れを社会全体の問題として、地域による取り組みを展開しようとするものである。テレビ視聴についても、地域や学校単位で同様の取り組みが行われつつある。それが「ノーテレビデー」である。鳥取県三朝町は2004年から保育所と学校が連携して「ノーテレビデー」に取り組んできたが、2007年10月20日、町議会は、町ぐるみでテレビを見る時間の削減を目指す「ノーテレビデーの町」宣言を可決した（2007年12月20日 産経ニュース）。千葉県市原市の市立戸田小学校は2005年春から、テレビを見たりゲームをしたりしない日を週に1日設ける「ノーテレビ・ノーゲームデー」活動に取り組んでいる。また、愛知県教育委員会は、「あいちの教育に関するアクションプラン」の取り組みの一つとして「ノーテレビデー・ノーゲームデー」の普及を挙げている。（ノーテレビデー・ノーゲームデー愛知県講式Webサイト）。「ノーテレビデー」の取り組みが全国に広がっている背景には、テレビが子どもたちの生活時間を圧迫するだけでなく、テレビ視聴による心身へのマイナス方向の影響が懸念されているからに他ならない。

このように、テレビは現代人にとって重要なメディアである一方、子どもにとっての弊害が論じられ、地域社会や学校からの規制が加えられつつある。テレビ視聴が子どもにどのような影響を及ぼすのかを詳細に解明することが急務である。そこで本研究では、テレビ視聴と小・中学生の生活および発達との関連を質問

紙調査により明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

1) 子どものテレビ視聴の現状

ベネッセの子ども生活基本調査によると、小学生の一日平均テレビ・ビデオ視聴時間は121分、一日3時間以上見ている者は24%であった(ベネッセ2005)。また、文部科学省が2005年に行った調査においては、「家で食事中テレビを見ないようにしている」のは約2割、「全くしていない」は半数を超え、約8割がテレビを見ながら食事をしている実態が明らかになっている。テレビ視聴が多く割合を占めるメディア総接触時間が長くなるほど、就寝時間が遅くなり、気持ちよく起きられる割合が減少している(文部科学省2006)。さらに、2007年の全国学力・学習状況調査によると、テレビ・ビデオを見る時間が短い児童の方が、学校外の学習時間が長い傾向があるという結果が報告されている。

2) テレビ視聴が子どもの心身に及ぼす影響

テレビ視聴の効果に関しては、さまざまな研究がなされている。アメリカの社会学者G. ガープナーは、テレビ視聴が視聴者の社会認識を「現実世界」よりも「虚構世界」に近くすることを明らかにした(橋元1999)。テレビにおける暴力の過度の視聴が、視聴者にマイナスの影響を及ぼすとする説もある(海後1999)。

子どものテレビ視聴の否定的な面が報告される一方で(カーリン・ノイシュツ/寺田2000など)、子どもにどのようにテレビを見せれば効果的な結果が得られるのか、テレビの積極的な面をいかに伸ばすのかを模索した研究もなされている(無藤1987、子どものテレビの会1981など)。

本研究は、小・中学生を対象に、日常的な場面を設定して、テレビ視聴特性と発達との関連を検討するものであり、これまでの調査にはない新たな知見が得られることが期待できる。

3. 研究方法

1) 調査方法

2008年6月～7月に近畿地区の小・中学校において、小学校3・4・5・6年生419名、中学校1年生119名、計538名(男子249名、女子289名)を対象に、集合法により自記式質問紙調査を行った。

主な調査内容は(1)基本的な生活習慣、(2)テレビ視聴の実態、(3)テレビ視聴に対する保護者の態度、(4)家族のコミュニケーション、(5)子どもの発達である。

2) 分析方法

図1に本研究の分析枠組みを示している。独立変数にテレビ視聴特性、従属変数に子どもの発達を設定して、両者の関連について、一元配置分散分析を用いて分析した。また、テレビ視聴特性に影響を及ぼす要因について明らかにするため、学年、性別、自分の部屋のテレビ台数、一日テレビ視聴時間という結果が報告されている。

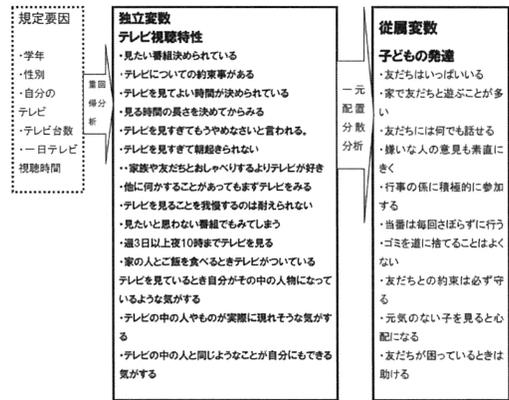


図1 分析枠組み

4. 研究結果および考察

1) 調査対象者のテレビ視聴の実態

テレビの保有については、42%の小・中学生が自分の部屋にテレビがあると答えている。テレビゲームの普及により、個室、子ども部屋へのテレビの設置が急速に進んだと考えられる。家のテレビ台数の平均は、2.7台、92%が「テ

レブが好き」と答えている。数字を書き込む形で一日のテレビ視聴時間の回答を求めたところ、平均3.1時間であり、前述のベネッセの調査と比べて長くなった。

「どのような時にテレビを見るか」に5つの場面を設けて複数回答を求めたところ、「家で暇な時」74%、および「ご飯を食べながら」の68%が高率であった。「テレビを誰と見るか」に関しては、きょうだい最も多く40%、次いで母34%であった。よく見る番組は「ドラマ」が68%と最も多く、次いで「お笑い」59%、「アニメ」、「歌番組」、「スポーツ」の順であった。

2) 独立変数：テレビ視聴特性

テレビ視聴特性については、テレビを見る態度、テレビ視聴に関する保護者の態度やしつけ、テレビを見ている時の気持ちなど、テレビに関する具体的な場面を設定して「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」「あてはまらない」の3つの選択肢を設けて回答を求めた。図2には、「とてもあてはまる」と答えた割合を、割合が

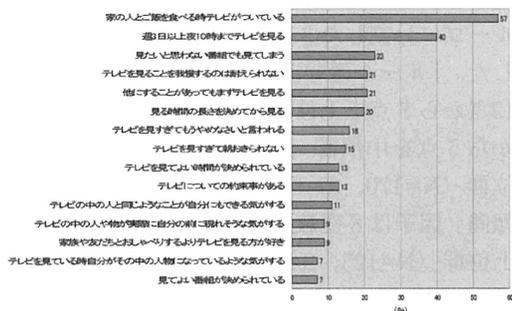


図2 テレビ視聴特性

高かった順に示している。

「家の人とご飯を食べる時テレビがついている」が57%と最も多く、前述の先行研究の結果とも合致する。次いで「週3以上夜10時までテレビを見る」が40%、「見たいと思わない番組でも見てしまう」23%と、テレビが児童・生徒の生活に深く浸透していることがうかがえる。一方で、「見てよい番組が決められている」「テレビについての約束事がある」という児童・生徒はともに13%と多くなく、「見てよい番組

が決められている」のはわずか7%、テレビに関するしつけがあまりなされていないことが明らかとなった。割合が高くないが、「テレビの中の人と同じようなことが自分にもできそうな気がする」「テレビの中の人や者が実際に自分の前に現れそうな気がする」に「とてもあてはまる」と回答した児童生徒もともに9%おり、現実と虚構現実との混同が懸念される。

次に、テレビ視聴特性の15変数について因子分析を行った結果を報告する。主因子法、回転はKaiserの正規化を伴うバリマックス法を用いて因子抽出を行った結果、表1に示すように3つの因子が抽出された。第1因子は「テレビを見る長さを決める」「テレビの約束事がある」「テレビを見る時間が決められている」「見てよい番組が決められている」の4変数であり、「ルール遵守」因子と命名した。第2因子は「週3日以上夜10時までテレビを見る」「テレビを見すぎて朝起きられない」「ご飯を食べる時テレビがついている」「見たくない番組でも見てしまう」「何かすることがあってもまずテレビを見る」「テレビを見るのを我慢するのは耐えられない」「家族や友だちのおしゃべりよりテレビが好き」「テレビを見すぎてやめなさいと言われる」の8変数で、「テレビ依存傾向」因子と命名した。第3因子は、「テレビの中の人と同じようなことができると思う」「テレビを見ている時自分がその中の人物になって動いていると感じる」「テレビの中の人や物が実際に自分の前に現れると思う」の3因子である。「テレビ熱中傾向」因子と命名した。

表1 テレビ視聴特性の因子分析

変数項目	第1因子 ルール遵守	第2因子 テレビ依存傾向	第3因子 テレビ熱中傾向
長さ決める	0.649	-0.328	-0.006
テレビの約束事がある	0.608	-0.016	0.224
時間決められている	0.812	-0.108	0.058
番組決められている	0.343	-0.027	0.076
夜10時まで見る	-0.286	0.55	0.053
起きられない	-0.087	0.563	-0.062
ご飯のときテレビ	-0.239	0.384	0.027
見たくなくても見てしまう	-0.024	0.538	0.078
何よりもまず見る	-0.137	0.712	0.124
テレビ我慢いや	-0.047	0.65	0.119
おしゃべりよりテレビ	0.004	0.377	0.249
やめなさいと言われる	0.235	0.314	-0.007
同じことができる	0.068	0.145	0.562
自分がテレビの中	0.155	0.029	0.602
登場人物現れる	0.068	0.045	0.684

3) 従属変数：子どもの発達

子どもの発達については、子どもの道徳観、倫理観、人間関係などに関して、具体的な10場面を設定して、テレビ視聴と同様に、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」の3つ選択肢を設けて回答を求めた。「とてもあてはまる」と回答した割合を高い順に図3に示している。「ゴミを道に捨てることはよくないことだと思う」児童・生徒は77%と高く、次いで「当番を毎回必ず行う」68%、「友だちがいっぱいいる」64%の順であった。逆に、「友だちには何でも話せる」「家に帰ってから友だちと遊ぶことが多い」と回答したのは全体の4分の1程度であり、「嫌いな人の意見でも素直にきける」はもっとも低率の16%であった。友だち関係が苦手な子ども像がうかがいあがる。

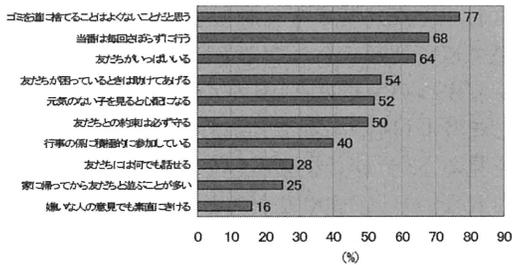


図3 子どもの発達

これらの10変数について、因子分析を行った。主因子法、回転はKaiserの正規化を伴うバリマックス法を用いて因子抽出を行った結果、表2に示すように、3つの因子が抽出された。第1因子は、「嫌いな人の意見でも素直にきける」「元気がない友達を見ると心配になる」「友だちが困っている時には助けてあげる」の3変数であり、「思いやり」因子と命名した。第2因子は「友だちがいっぱいいる」「家で友だちと遊ぶことが多い」「友だちには何でも話せる」「友だちとの約束は必ず守る」の4変数であり、「友だち関係」因子と命名した。第3因子は「行事のかかりに積極的に参加する」「当番は毎回サボらず行う」「ゴミを道に捨てることはよくないことだと思う」の3変数であり、「道徳心」因子と命名した。

表2 子どもの発達の因子分析

変数項目	第1因子 思いやり	第2因子 友だち関係	第3因子 道徳心
意見素直にきける	0.42	0.163	0.138
元気がない友だち心配	0.711	0.061	0.224
困った友だち助ける	0.623	0.197	0.086
友だちがいっぱいいる	-0.019	0.61	0.167
友だちと遊ぶことが多い	0.232	0.548	-0.259
友だちに何でも話せる	0.25	0.453	0.022
友だちとの約束は守る	0.387	0.415	0.042
行事の係に積極的	0.116	0.24	0.58
当番必ず行う	0.032	-0.045	0.391
ゴミを捨てるのはよくない	0.214	-0.031	0.384

4) テレビ視聴が子どもの発達に及ぼす影響

次に、テレビ視聴特性と子どもの発達との関連を明らかにするため、テレビ視聴特性の15変数を因子分析して得られた3因子と、子どもの発達の各々の10変数との関連について、一元配置分散分析を用いて分析した結果を述べる。

得られたテレビ視聴特性3因子各々の変数の α 係数は、「ルール遵守」0.677、「テレビ依存」0.743、「テレビ熱中」0.658であった。そこで、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」に各々3, 2, 1点を与え、合計点から全体を上位群、中位群、下位群の3グループに分割した3つの変数とし、独立変数とした。「ルール遵守」因子は4変数を合計し、12点から8点を上位群 (N=90, 17.4%)、7点から5点を中位群 (N=228, 44%)、4点を下位群 (N=170, 31.5%) とした。「テレビ依存傾向」因子は8変数を合計し、24点から18点を上位群 (N=123, 24.5%)、17点から12点を中位群 (N=252, 50.1%)、11点から8点を下位群 (N=128, 25.4%) とした。「テレビ熱中傾向」因子は3変数を合計し、9点から5点を上位群 (N=168, 32%)、4点を中位群 (N=107, 20.4%)、3点を下位群 (N=250, 47.6%) とした。

子どもの発達の3因子はいずれも十分な α 係数が得られなかったため、10変数各々を用いて、上記テレビ視聴特性の3変数との関連を一元配置分散分析にて分析した。

① 「ルール遵守」と子どもの発達

分析の結果をまとめたものを表3に示した。「思いやり」因子に関しては3変数中2変数、

テレビに関してのルールを遵守する児童・生徒は、「元気がない子を見ると心配になる」「友だちが困っていると助ける」という者が多い。「友だち関係」因子は、「友だちとの約束を守る」, 「道徳心」因子は、「行事の係に積極的に参加する」の各々1変数のみに有意差が認められた。友だちを助けたり心配し, 約束を守り, 係に積極的な「優等生」の姿がうかびあがった。

表3 「ルール厳守」と子どもの発達

思いやり		
元気がない友だち心配	***	上位群>中位群・下位群
困った友だち助ける	*	上位群>中位群
友だち関係		
友だちとの約束は守る	*	上位群>下位群
道徳心		
行事の係に積極的	***	上位群>中位群・下位群

②「テレビ依存傾向」と子どもの発達

分析の結果をまとめたもの表4に示した。前述の「ルール遵守」とは異なり, 「思いやり」因子には有意差はみられなかった。友だち関係もテレビに依存する児童・生徒は, 「家で友だちと遊ぶことが多い」「友だちに何でも話せる」と答える者が多く, 友だち関係が良好である。しかし, 「道徳心」因子に関しては, マイナスの傾向が現れた。友だちとの関係はよいが, 行事の係には消極的, 当番はさぼりがちな, いわゆる「やんちゃ」な児童・生徒像が見て取れる。

表4 「テレビ依存傾向」と子どもの発達

友だち関係		
友だちと遊ぶことが多い	***	上位群>中位群>下位群
友だちに何でも話せる	**	上位群>中位群・下位群
道徳心		
行事の係に積極的	*	上位群<中位群・下位群
当番必ず行う	*	上位群<下位群

③「テレビ熱中傾向」と子どもの発達

分析の結果をまとめたものを表5に示した。「テレビ熱中傾向」因子の3変数は, いずれも「虚構現実」の世界に入り込む場面を設定している。前述の先行研究にも, テレビ視聴者の社会認識が「虚構現実」化するというマイナス面の影響について報告する研究があるが, 今回の

調査ではマイナスの効果は現れなかった。元気がない友だちを心配し, 友だち関係も良好である。また, テレビ依存の児童・生徒とは異なり, 行事の係にも積極的である。テレビプログラムは子どもにとって弊害があるものばかりではなく, 「虚構世界」に入り込むこともストレス回避などのプラス面の効果があるのではないかと考えられる。

表5 「テレビ熱中傾向」と子どもの発達

思いやり		
元気がない友だち心配	*	上位群>下位群
友だち関係		
友だちと遊ぶことが多い	**	上位群>下位群
友だちに何でも話せる	*	上位群>下位群
道徳心		
行事の係に積極的	*	上位群>下位群

5) テレビ視聴特性の規定要因

最後に, テレビ視聴特性の規定要因を明らかにするために重回帰分析を行った。その結果を表6に示している。テレビ依存傾向にのみ有効な回帰式が得られている。学年が上るにほど, 家のテレビ台数が増えるほど, 一日のテレビ視聴時間が増えるにしたがって, テレビ依存が高くなった。もっとも影響が大きいのは, 一日のテレビ視聴時間である。テレビを見る時間を決めてテレビを見るなど, 家庭におけるルールをつくり, 保護者が指導することが必要と考えられる。

表6 テレビ視聴特性を規定する要因

変数	ルール遵守	テレビ依存	テレビ熱中
	β		
学年	-0.056	0.322 ***	-0.011
性別	-0.074	0.03	-0.121 *
部屋にテレビ	-0.018	0.076	-0.005
テレビ台数	-0.015	0.143 **	-0.051
視聴時間	0.037 ***	0.374 ***	0.131 *
R2 乗	0.097	0.36	0.034
調整済み R2 乗	0.083	0.35	0.019
F 値	6.974	35.822	2.32
N	329	324	335

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

4. まとめと今後の課題

テレビ視聴と子どもの発達との関連を明らかにするために, 小・中学生538名を対象に質問

紙調査を行った。得られた結果は、以下の5点にまとめることができる。

- (1) 小・中学生の4割が、自分の部屋にテレビを持ち、9割以上がテレビ好き、一日3時間テレビを見ており、食事時にみることも多い。
- (2) 家庭にテレビについてのルールのある児童・生徒は、思いやり、道徳心がある傾向にある。
- (3) 週3日以上夜10時までテレビを見たり、つい見ってしまう、テレビを見ないことが耐えられないなど、テレビ依存の子どもは、友だちとよく遊び、友人関係は良好であるが、道徳心に課題がある。
- (4) テレビに熱中し、「虚構現実」に入り込むことについては、マイナス面は認められなかった。テレビに熱中する児童・生徒は、友だち関係が良好で、思いやり、道徳心にも長けている。
- (5) 学年が上がるほど、家のテレビ台数が多く、テレビ視聴時間が長くなるほど、テレビ依存傾向が増す。

今回の調査では、テレビへの依存は道徳心に課題が見られたが、テレビに熱中することも含めて、むしろ友だち関係にプラスの方向で影響を及ぼすことが明らかとなった。テレビ視聴は子どものコミュニケーションの有効なツールとして働くことが示唆される。「虚構世界」に入り込むこともマイナスの効果は認められなかった。先行研究では、マイナス面ばかりが強調さ

れ、教育委員会や地方自治体、各学校で広がりを見せる「ノーテレビデー」につながっているものと考えられる。確かに、子どもの生活時間を圧迫する恐れがあることは事実であり、対策が必要であるが、「テレビを見ない」という選択を押し付けることには、今後充分検討する余地があると考えられる。優れた情報ツールであるテレビを最大限に利用できる能力を育むメディアリテラシー教育が、学校現場や社会教育現場に求められる。

謝 辞

本研究の調査にあたっては、西田裕香氏に多大なご協力をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

文 献

- 日本放送協会, 2005「国民生活時間調査」
 神川康子他, 2005「睡眠習慣と反射指摘活動性に関する研究」『富山大学生涯学習教育研究センター年報』7号, 25-35頁
 ベネッセ, 2007「第3回子育て生活基本調査」
 文部科学省, 2006「子どものメディア接触と心身の発達に関わる調査・研究」
 橋元良明, 1999『映像メディアの展開と社会心理』北樹出版, 71-72頁
 海後宗男, 1999『テレビ報道の機能分析』風間書房, 31-32頁
 カーリン・ノイシュツ/寺田隆生訳, 2000『テレビを消してみませんか?—シュタイナー幼児教育の遊ばせ方』学陽書房
 無藤隆, 1987, 『子どもとテレビ』/子どものテレビの会編, 1981『テレビと子ども—どう見ているか! どう見せるか』学陽書房, など